茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第17集

上ノ宿遺跡Ⅳ

携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成26年３月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第17集

上ノ宿遺跡Ⅳ

携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成26年３月

常陸大宮市教育委員会

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し，県都水戸市から約20kmの，平成の大合併で誕生した人口約４万４千人の市です。

市域は，鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川，南西部には那珂川，中央部には緒川や玉川の清流が流れ，山間には美林が涵養されていて，まさに山紫水明の地となっております。また，河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり，大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は，古くから人々の生活の場となり，多くの歴史を重ねております。そのため市域には，各時期の集落跡をはじめ，古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しているのです。

これらの遺跡は，私たちの祖先がどのように生活したのか，そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は，私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えましょう。このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは，私たちの大切な任務であり，郷土の発展のためにも重要なことと考えております。

このたび発掘調査が行われた上ノ宿遺跡では，近隣で過去３度の発掘調査が行われており，奈良・平安時代だけで100軒を超える竪穴住居跡が確認されたほか，「風字硯」や「耳皿」，墨書土器などといった貴重な遺物が出土し，当時の一大拠点集落跡として脚光を浴びました。

今回の発掘調査は携帯電話基地局建設事業に伴い，周知の遺跡である上ノ宿遺跡の記録保存を目的として，平成25年４月８日から12日まで有限会社日考研茨城に委託して実施し，弥生時代，奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されました。過去の調査では縄文，奈良・平安，中世と幅広い時代の集落跡が確認されていましたが，このたび新たに弥生時代の遺構が確認されたことは，上ノ宿遺跡の立地条件の良さを物語るものと思われます。

本書は，この発掘調査の成果を報告するものです。歴史研究の学術資料としてはもとより，地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また，この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査にあたり多大なるご理解・ご協力をいただきましたソフトバンクモバイル株式会社様，ご指導いただきました茨城県教育庁文化課様，全般にわたりご協力いただきました地元の皆様，適正かつ慎重な調査をしていただいた有限会社日考研茨城様，その他ご指導・ご協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成26年３月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長　　上久保　洋一

例　言

1　本書は，茨城県常陸大宮市宇留野3065－１の一部に所在する上ノ宿遺跡第４次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は，携帯電話基地局建設に伴う記録保存調査として行ったもので，常陸大宮市教育委員会の指導のもと，ソフトバンクモバイル株式会社モバイルネットワーク本部東京技術統括部　基地局建設部　部長　吉川充の委託を受けて，有限会社 日考研茨城が実施した。発掘調査面積は144㎡である。

3　発掘調査は下記の期間に実施した。

調査期間　平成25年４月８日～平成25年４月12日

4　発掘調査は，常陸大宮市教育委員会が主体となり，下記の体制で実施した。

調査指導　常陸大宮市教育委員会生涯学習課

調査担当　大渕由紀子[(有)日考研茨城]　現地・整理

調査員　大渕淳志[(有)日考研茨城]　現地・整理

5　整理及び報告書作成にかかわる作業は，常陸大宮市教育委員会の指導・監督のもとに，遺物の実測は遠藤啓子，トレースから版組までを大渕由紀子・遠藤啓子が行った。

6　本書の執筆は，後藤俊一(常陸大宮市教育委員会)，大渕淳志・遠藤啓子・大渕由紀子・小川和博(日考研茨城)が行った。編集は大渕淳志が担当した。

7　出土遺物及び記録類は，常陸大宮市教育委員会において保管している。

8　発掘調査および報告書作成に当たり，以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して，深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)

茨城県教育委員会，公益財団法人茨城県教育財団，ひたちなか市埋蔵文化財調査センター，土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場，鈴木素行，佐々木義則，萩野谷悟，鴨志田篤二

9　発掘調査・整理作業参加者は以下の通りである。

現地調査作業員　海老原龍生，大谷和枝，小野豊，島崎清子，中島貞雄，中島トミ子，中村薫，沼田久男

整理調査作業員　大野美佳[(有)日考研茨城]

凡　例

1　当遺跡の調査区は，公共座標(世界測地系第Ⅸ系)をもとに５ｍ方眼のグリットを設定した。北西隅を起点に，南北方向は北からアルファベットを付して，東西方向は西から算用数字を付し，「Ａ－1」区のように組み合わせてグリッド名とした。なお，北西隅の座標値はX＝60765，Ｙ ＝52450である。

2　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北を示す。

3　本書では，現地調査時に付した遺構番号をそのまま遺構名として使用した。

4　遺構番号は，第１～３次調査を踏襲し種別ごとに通し番号を付した。使用した遺構種別の略号は下記のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　　SI…竪穴遺構

5　挿図中で使用したスクリーントーンは次の通りである。

遺構　▒地山　　▒黄色パミス層(赤城－鹿沼(Ａｇ－ＫＰ))堆積層

遺物　■須恵器断面

6　遺構平面・断面図中の●は遺物の出土位置を示す。

7　挿図中の「K」は攪乱を示す。

8　遺構・遺物実測の作成方法については，次のとおりである。

⑴ 遺構配置図は200分の１，各遺構の実測図は60分の１の縮尺とした。

⑵ 遺物の実測図は，弥生土器片は３分の１，土師器・須恵器，石器(凹石・磨石)は４分の１の縮尺とした。

9　遺構写真は35mmのモノクロフィルム，35mmのリバーサルフィルムおよびデジタルカメラにより撮影を行っている。

10　遺物観察表は一覧表とした。計測値の数値で，残存値は（　），復元値は［　］を，計測及び復元不可は「－」を付して示した。

11　土層観察と土器の色調判定には『新版　標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社 2001年版)を使用した。

12　掘立柱建物跡および竪穴遺構の「主軸方位」は，遺構の長軸方向に座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

13　第１図は，「常陸大宮市都市計画図　図６」(2,500分の１)を，縮尺を含め，一部改変して使用した。第２図は，国土地理院発行の25,000分の１地形図「常陸大宮」を一部改変して使用した。

目　次

ごあいさつ …… i
例言 …… ii
凡例 …… iii
目次 …… iv
挿図目次・表目次・写真図版目次 …… v
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 3
第２章　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 4
　第１節　遺跡の位置 …… 4
　第２節　周辺の遺跡 …… 4
第３章　調査の成果 …… 9
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 10
　　１　弥生時代の遺構と遺物 …… 10
　　（１）竪穴遺構 …… 10
　　２　古代の遺構と遺物 …… 13
　　（１）掘立柱建物跡 …… 13
第４章　まとめ …… 15

付表　出土土器観察表 …… 21
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　上ノ宿遺跡第１次～第４次調査区及び上宿上坪遺跡発掘区(1：3,000) …… 2
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1：25,000) …… 5
第３図　遺構配置図 …… 8
第４図　基本層序 …… 10
第５図　SI130実測図 …… 11
第６図　SI130出土遺物実測図 …… 11
第７図　SI131実測図 …… 12
第８図　SI131出土遺物実測図 …… 12
第９図　SB23実測図 …… 14
第10図　SB23出土遺物実測図 …… 14
第11図　高野寺畑遺跡・豊岡宮前遺跡出土の磨石類 …… 19

表　目　次

表１　　上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧 …… 6
付表　　出土土器観察表 …… 21

写　真　図　版　目　次

PL.１　１．遺跡遠景(東から)
　　２．調査前近景(西から)
PL.２　１．調査区全景(南から)
　　２．基本層序(PG)(西から)
PL.３　１．SI130全景(南西から)
　　２．SI131全景(北から)
PL.４　１．SI130・131出土遺物
　　(１・２：SI130，３～８：SI131)
PL.５　１．SB23全景(北から)
　　２．SB23出土遺物

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は，携帯電話基地局建設事業に伴う事前調査である。

平成24年５月11日，大和電設株式会社　代表取締役　栗原　洋から常陸大宮市教育委員会に，同事業予定地内における埋蔵文化財の所在の有無について照会がなされた。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地上ノ宿遺跡を含んでいた。このため平成24年５月29日に市教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査はトレンチ方式で行い，その結果，２か所設置されたトレンチ内よりピット群が確認され，併せて土師器が確認されたことにより，古代の集落が所在することが判明した。

その後事業者側の事情により，調査主体をソフトバンクモバイル株式会社モバイルネットワーク本部東京技術統括部基地局建設部部長　吉川　充に変更し，平成24年７月30日に茨城県教育委員会と協議を行い，平成24年８月30日，茨城県教育委員会から発掘調査を実施すべき旨回答を受けた。

これを受けてソフトバンクモバイル株式会社は，有限会社日考研茨城に調査を委託し，平成25年３月４日，ソフトバンクモバイル株式会社・常陸大宮市教育委員会・有限会社日考研茨城は常陸大宮市上ノ宿遺跡埋蔵文化財に関する協定書を締結し，平成25年４月８日から平成25年４月12日まで有限会社日考研茨城が本調査を実施した。

（後藤俊一）

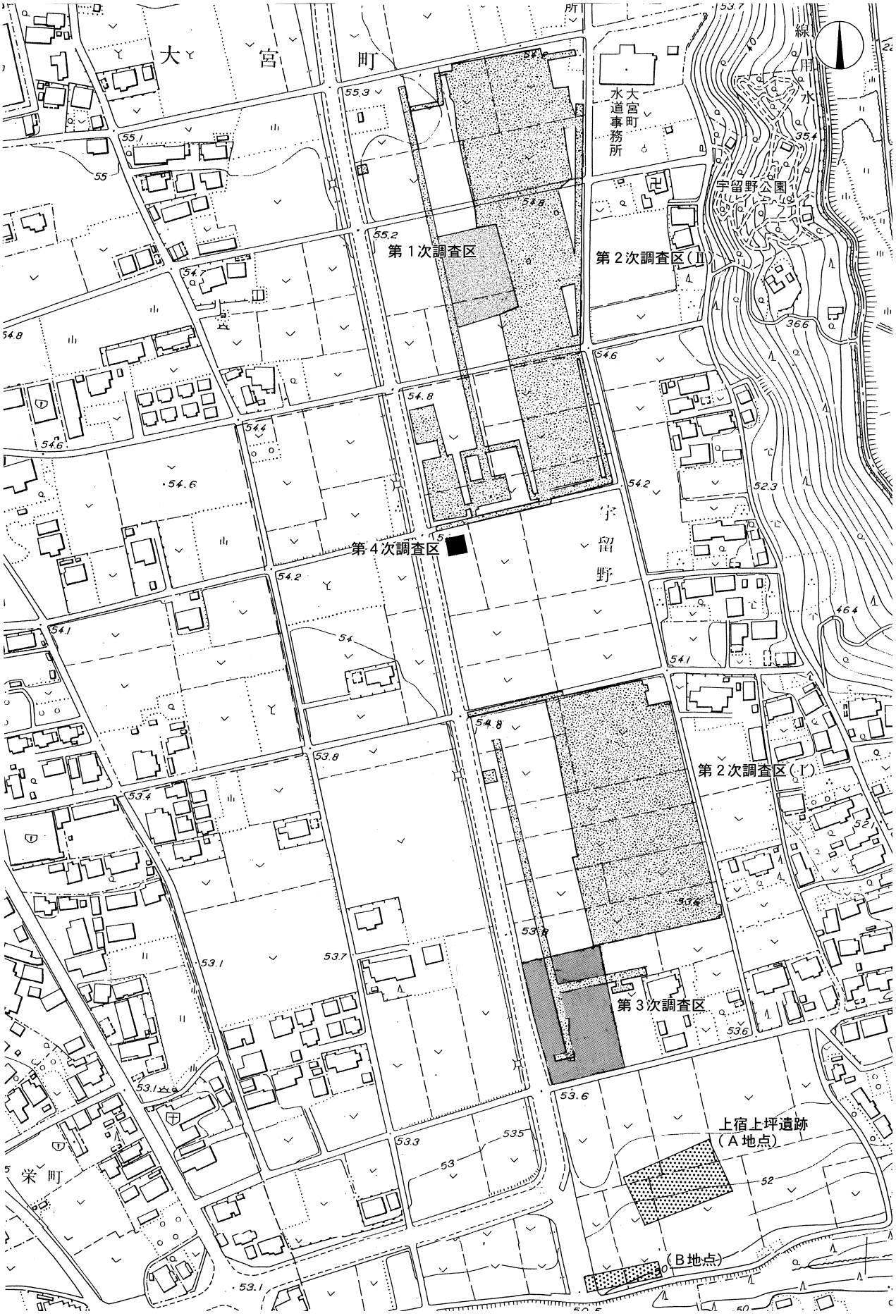
第２節　調査経過

今回の本調査で第４次調査となる。調査期間は，平成25年４月８日から12日まで５日間である。試掘調査結果に基づき，開発予定区域全面にあたる144㎡を調査することとなった。これまで当遺跡では27,657.68㎡が発掘調査され，旧石器時代から弥生時代，奈良・平安時代，中世まで古墳時代を除き多くの遺構・遺物が検出されている。今回は調査範囲こそ小規模であるが，初めて弥生時代の遺構が確認された。

調査方針の基本は，まず重機による表土除去から開始し，遺構確認のための精査を人力により行う。試掘調査で把握されていた黒色土の落ち込み部はいずれも掘立柱建物跡の柱穴であった。さらに隣接するように楕円形の落ち込みを２ヵ所検出する。ここで弥生土器が出土したことから竪穴建物跡と判断し，略号をSIと付したものの，内部施設として炉が無いこと，さらに床面や壁面が貧弱であることなどから，居住施設ではなく，墓壙や作業施設，倉庫等の可能性が高いものとして捉え，後日竪穴遺構とした。なお，遺構番号については第１次～第３次調査からの継続とし，一連の通し番号を付した。

以上のように調査対象地が携帯電話基地局の建設であることから非常に制約された調査区の設定であったにもかかわらず，今回初めて弥生時代の遺構が検出された意義は大きく，いままで土器の出土はあるものの，遺構の検出はなく，弥生時代の居住域が西から北へ展開することが予想される。最後に旧石器時代の深掘り調査を実施し終了した。

（大渕淳志）



第１図　上ノ宿遺跡第１～４次調査区及び上宿上坪遺跡発掘区（1：3,000）

第３節　調査日誌

2013年４月８日～４月16日

４・８　本日より上ノ宿遺跡第４次調査を開始する。重機による表土除去後，人力により遺構検出のための精査作業を実施する。

４・９　遺構検出のための精査作業を実施し，SI130，SI131，SB23を検出する。調査区全体の座標測量を行う。

４・10　SI130，SI131，SB23の遺構調査を実施する。旧石器時代確認のための深掘り調査を行う。

４・12　SI130，SI131，SB23の平面実測および全景写真撮影を実施した後，遺構の掘方調査を行い現場の調査を終了する。

４・15　常陸大宮市教育委員会による調査終了確認を実施する。

４・16　調査区域の埋め戻し作業を実施する。

（大渕淳志）

第２章　遺跡の位置と周辺遺跡

第１節　遺跡の位置（第１・２図）

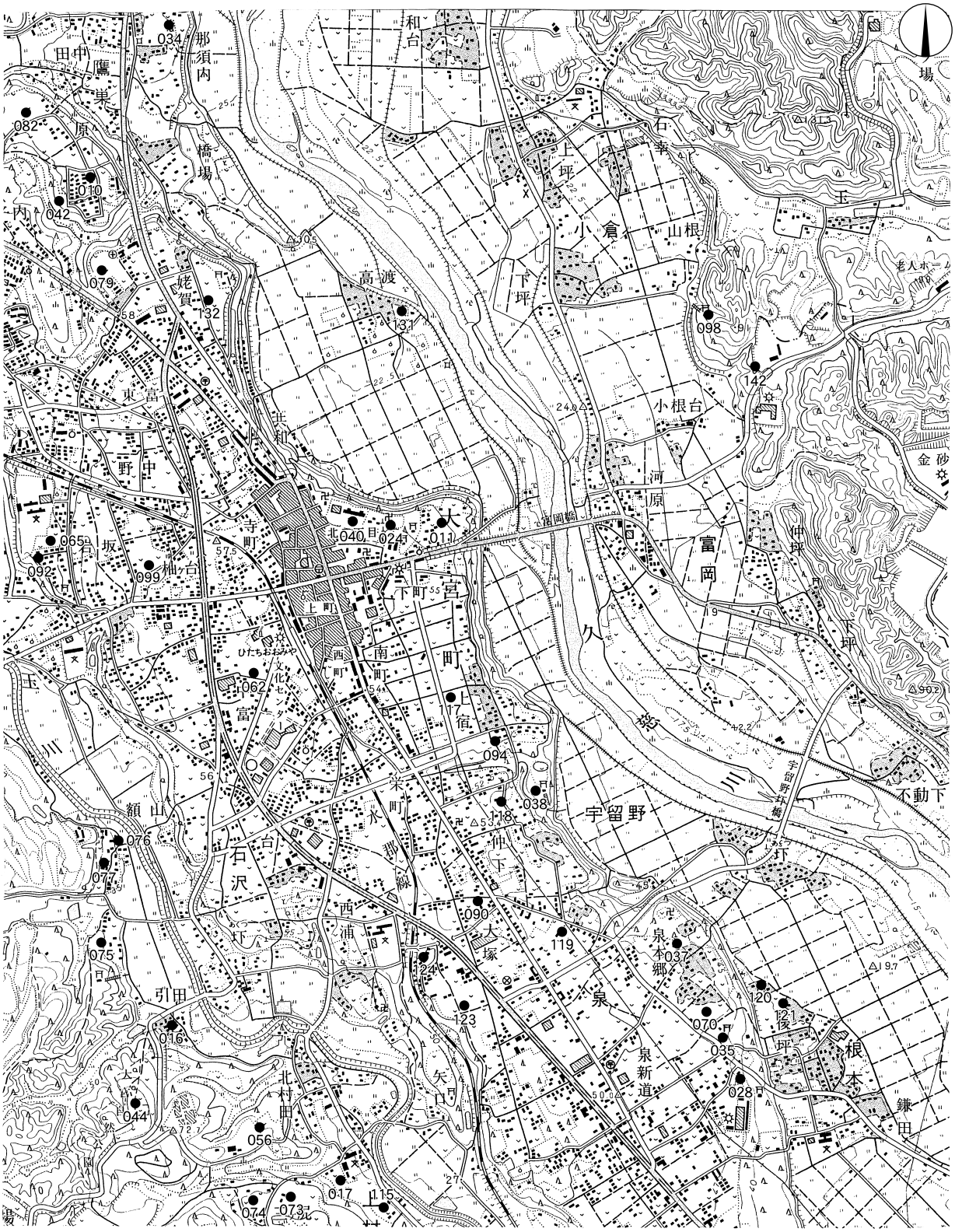
本遺跡は，北緯36°32′42″08，東経140°25′09″の茨城県北部，常陸大宮市宇留野字百駄3065－１に所在する。ここは水郡線常陸大宮駅東わずか600m，旧国道118号線に並行し，市街地の東端に位置する。付近の台地は八溝山系から延びた丘陵の一部が北から西側に突出した洪積世の台地が形成され，東に久慈川，西に那珂川によって大きく分断され，さらに市街地西に流れる玉川によって二分される。遺跡の立地する通称大宮台地は久慈川と玉川に挟まれた南北に細長く延びた舌状台地で，久慈川と玉川が下岩瀬付近で合流することによって収束する。こうした大宮台地は両河川とその支流によってさらに浸食され複雑な地形を呈している。遺跡は東に流れる久慈川の右岸で，直接影響を受け，より開析された比較的幅広く平坦な台地上に立地していたため，遺跡の範囲が明確に線引きできない。すなわち標高54m前後の平坦面が南北800m，東西1,500mまで広がっており，北は「部垂城跡(040)」，南は「宇留野城跡(038)」によって境されるものの，西は玉川まで達する広さがあり，東端に位置する本遺跡から西の玉川まで小規模な「中富遺跡(062)」の１遺跡しか確認されていない。こうした状況のなか本遺跡は南北500m，東西300mという大規模な範囲が遺跡として周知されている。さらに平成15年に発掘調査を実施した「上宿上坪遺跡(094)」とは市道によって境されるだけでほぼ同一遺跡と理解してもよいほど遺跡の範囲は明瞭ではない。なお東部の久慈川低地との比高差は約32.5mを測る。調査前の現況は畑地で，遺跡北西部は市の中心地である。

（遠藤啓子・大渕由紀子）

第２節　周辺の遺跡（第２図，表１）

上ノ宿遺跡が立地する常陸大宮市は東に久慈川，西に那珂川と県内を代表する主要河川に挟まれ，さらに中央には玉川が流れ，県北部において水利に恵まれた稀にみる肥沃な環境を呈している。そのため旧石器時代から中近世に至るまで多くの遺跡が周知されており，各時期それぞれ学史的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。いま時期ごとに主な遺跡を列挙してみても，旧石器時代の「梶巾遺跡」，縄文時代の「坪井上遺跡」，「高ノ倉遺跡」，弥生時代の「小野天神前遺跡」，「泉坂下遺跡(120)」，「上岩瀬富士山遺跡」，「小祝梶巾遺跡」，古墳時代の「一騎山古墳群」や「糠塚古墳」，奈良・平安時代の「小野源氏平遺跡」や「鷹巣原遺跡(010)」等が知られている。これらはいずれも県内の歴史を語るとき必ず代表的な遺跡のひとつとして挙げられ，しかも市内全体的にみて数少ない発掘調査によって明らかにされた成果であり，逆にみると市内どの遺跡の調査を実施しても注目度の高い成果が期待できることを示唆している。

さて，ここで本遺跡周辺遺跡の概要について，すでに市教育委員会で報告されている分布調査に基づき簡単に触れていきたい。まず旧石器時代の遺跡については「梶巾遺跡」で調査され，槍先形尖頭器が出土し，「小野天神前遺跡」でも細石核が採集されている。次の縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では昭和51，58年に調査された「梶巾遺跡」をはじめ，「諏訪台遺跡」「宮中遺跡(011)」「上岩瀬富士山遺跡」等21遺跡が知られ，また正式な調査は行われていないが，「河井台遺跡」では多



117上ノ宿遺跡　010鷹巣原遺跡　011宮中遺跡　016引田前遺跡　017北村田遺跡　024松吟寺古墳　028根本古墳群　034鷹巣戸内遺跡　035根本遺跡　037前小屋館跡
038宇留野城跡　040部垂城跡　042鷹巣瓦窯跡群　044大宮自然公園遺跡　045萱峯遺跡　056小中遺跡　062中富遺跡　065抽ケ台遺跡　070春日神社前遺跡
073後三ケ尻Ａ遺跡　074後三ケ尻Ｂ遺跡　075熊の石遺跡　076額山Ａ遺跡　077額山Ｂ遺跡　079姥賀遺跡　082鷹巣原Ｂ遺跡　090大塚遺跡　092抽ヶ台古墳
094上宿上坪遺跡　098山根遺跡　099見渡遺跡　118仲下遺跡　119駄木所遺跡　120泉坂下遺跡　121根本後坪遺跡　123上高作遺跡　124六丁遺跡　131高渡遺跡
132姥賀東遺跡　137前三ヶ尻Ｂ遺跡　142富岡七ツ塚群

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

表１　上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	番号	遺跡名	種別	時代・時期
117	上ノ宿遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安
010	鷹巣原遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	076	額山A遺跡	集落跡	奈良・平安
011	宮中遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	077	額山B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
016	引田前遺跡	集落跡	奈良・平安	079	姥賀遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
017	北村田遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	082	鷹巣原B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
024	松吟寺古墳	古墳	古墳	090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
028	根本古墳群	古墳群	古墳	092	抽ヶ台古墳	古墳	古墳
034	鷹巣戸内遺跡	集落跡	旧石器、奈良・平安	094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世
035	根本遺跡	集落跡	奈良・平安	098	山根遺跡	集落跡	
037	前小屋館跡	城館跡	奈良・平安、中世	099	見渡遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
038	宇留野城跡	城館跡	中世	115	北村田B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
040	部垂城跡	城館跡	中世	118	仲下遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安、中世
042	鷹巣瓦窯跡群	瓦窯跡	奈良・平安	119	駄木所遺跡	集落跡	奈良・平安
044	大宮自然公園遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	120	泉坂下遺跡	集落跡	弥生
056	小中遺跡	集落跡	奈良・平安	121	根本後坪遺跡	集落跡	奈良・平安
062	中富遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	123	上高作遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
065	抽ヶ台遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安
070	春日神社前遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	131	高渡遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
073	後三ケ尻A遺跡	集落跡	奈良・平安	132	姥賀東遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
074	後三ケ尻B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	142	富岡七ツ塚群	塚群	近世

量の石鏃が採集されている。そのほか中期の大集落として確認された「坪井上遺跡(005)」「高ノ倉遺跡」があり，縄文早期・中期から弥生時代に営まれた「小野天神前遺跡」は主となる晩期段階で土偶や亀形土製品をはじめ石剣，石棒，独鈷石等祭祀具が多数出土している。そして当遺跡は県内でも数少ない弥生時代中期前半まで継続され，市内に限らず県内を代表する遺跡のひとつとなっている。また，ここ「上ノ宿遺跡」では中期末葉から後期前半の集落跡で，竪穴建物群の周縁に土坑群が構築されている。そのほか周辺地域では，後期の「上岩瀬富士山遺跡」や「梶巾遺跡」が知られている。

弥生時代では中期の「小野天神前遺跡」が人面付土器を伴う再葬墓群として著名であるが，昭和55年に発見された「泉坂下遺跡(120)」が平成18年になり学術調査が実施され，再葬墓７基ほか土壙墓３基が検出されている。そのほか後期の集落跡として「上岩瀬富士山遺跡」や「梶巾遺跡」「坪井上遺跡」が知られている。

古墳時代では須恵器や形象埴輪を含め豊富な埴輪の出土が知られている「一騎山古墳群」のほか，前方後方墳である「富士山4号墳」は墳長38mを測り，県内でも最古の古墳のひとつとして周知されている。また「糠塚古墳」は80mの大形古墳である。さらに玉川左岸には「雷神山横穴群」と「岩欠横穴群」があり，いずれも横穴墓が5基ずつ確認されている。また集落跡も数は少ないが報告されている。「梶巾遺跡」では前・中期の竪穴建物跡が，「下村田遺跡」では後期の竪穴建物跡７軒が確認されている。

次の奈良・平安時代では本遺跡を含め市内の大半の遺跡で確認されており，その数は115遺跡以上にのぼり市内全体的の遺跡の実に80％を占めている。そのなかで主要遺跡のひとつが「鷹巣原遺跡(010)」である。８世紀中葉から10世紀にかけて32軒の竪穴建物跡と掘立柱建物跡が確認されている。さらに隣接して「鷹巣瓦窯跡群(042)」が知られており，ここで焼かれた瓦が竪穴建物跡のカマド構築材として利用されていた。そのほか隣接する「上宿上坪遺跡(094)」や「上坪遺跡」でも明確な集落跡として注目されている。これらに本遺跡が加わることで久慈川中流域における８世紀から10世紀にかけての拠点的集落がより鮮明になってきた。最後に中世では城跡として詳細な測量調査を実施した「前小屋館跡(037)」をはじめ「宇留野城跡(038)」や「菅又城跡」が知られているが，平成15年に発掘調査した

「上宿上坪遺跡(094)」では宇留野城跡北西側の一郭に位置する集落遺跡で明瞭な郭跡は確認できなかったものの，溝や土坑から古瀬戸の平碗・茶壺・志戸呂の擂鉢，常滑の甕や内耳土器，さらに硯の出土が報告されている。また近世の塚としては「富岡七ツ塚群(142)」が確認されている。

（遠藤啓子）

参考文献

阿久津久　1977「大宮町の遺跡」『大宮町史』大宮町役場

阿久津久　1978『茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)』(学術調査報告書Ⅰ) 茨城県立歴史館

荒井保雄　1996『一級河川玉川改修工事地内埋蔵文化財調査報告書　下村田遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第110集)

井上義安他　1979『茨城県富士山遺跡Ⅰ』大宮町教育委員会，茨城県労働者住宅生活協同組合

井上義安他　1985『茨城県梶巾遺跡』大宮町教育委員会，梶巾遺跡発掘調査会

井上義安他　1987『常陸鷹巣遺跡　第２次発掘調査報告書』大宮町教育委員会

井上義安他　2001『諏訪台遺跡』大宮町諏訪台遺跡発掘調査会

大宮町教育委員会　1985『常陸源氏平　那珂郡阿波郷丈部里比定地に於ける集落跡の調査』水戸北部中核工業団地内埋蔵文化財発掘調査会

大宮町教育委員会　1988『上村田小中遺跡』大宮町教育委員会

大宮町歴史民俗資料館　1995『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会

小川和博・大渕淳志他　2004『上宿上坪遺跡発掘調査報告書』大宮町教育委員会

小川和博他　2005『高ノ倉遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2008『上ノ宿遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2009『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第２次調査Ⅰ』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2009『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第２次調査Ⅱ』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2009『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2013『上ノ宿遺跡Ⅲ』常陸大宮市教育委員会

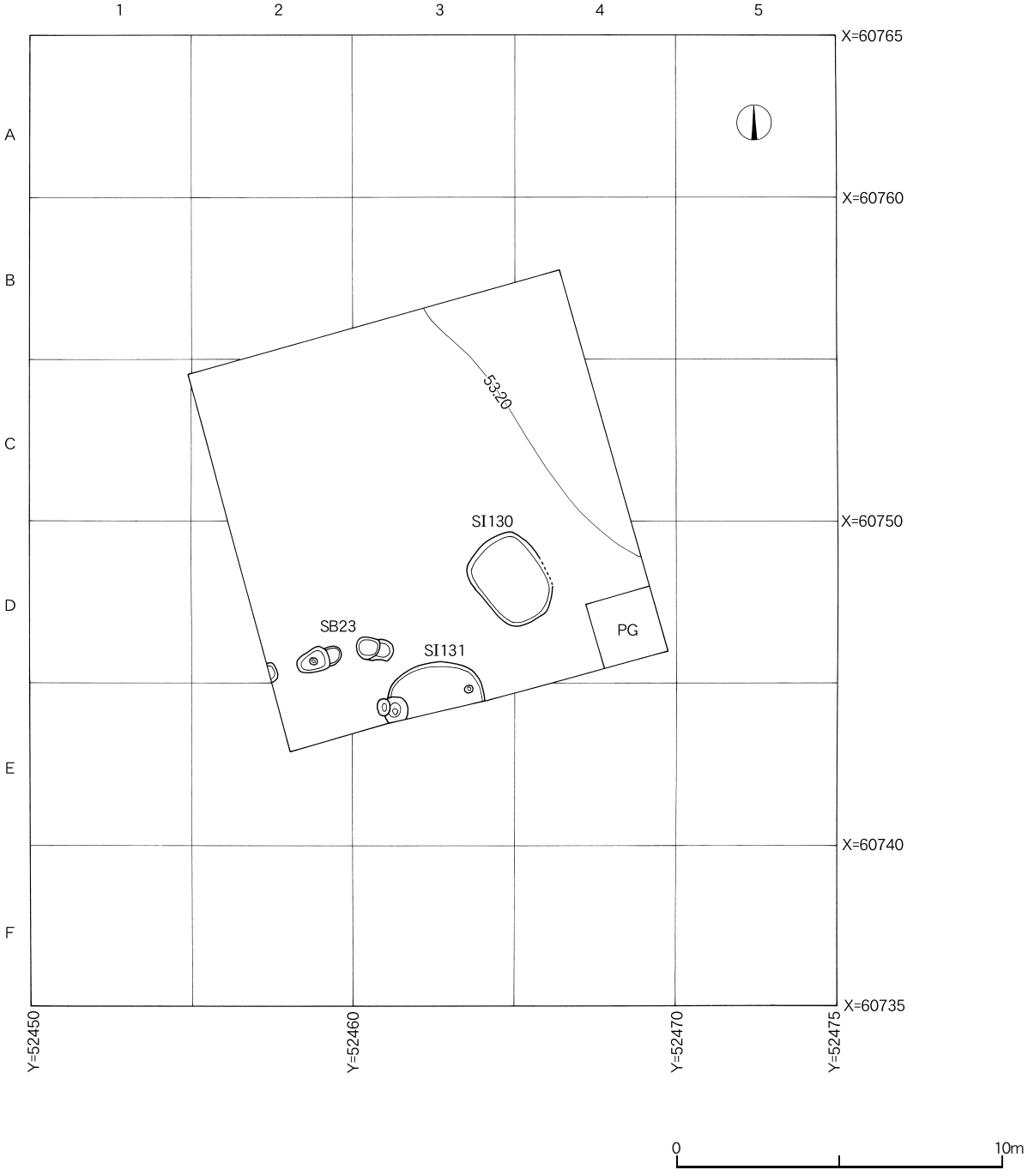
鈴木素行　2011『泉坂下遺跡』常陸大宮市教育委員会

高根信和他　1974『常陸一騎山』大宮町教育委員会

千種重樹　1999『常陸大宮坪井上遺跡』坪井上遺跡発掘調査会

戸山泰久他　1983『常陸鷹巣遺跡　第１次調査』大宮町教育委員会

渡邉浩実　2006『17国補導改第17-03-068-0-053号埋蔵文化財調査報告書　上岩瀬富士山遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第260集)


1
2
3
4
5
A
B
C
D
E
F
X=60765
X=60760
X=60750
X=60740
X=60735
Y=52450
Y=52460
Y=52470
Y=52475
5320
SI130
SB23
SI131
PG
0
10m

第３図　遺構配置図

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要（第３図）

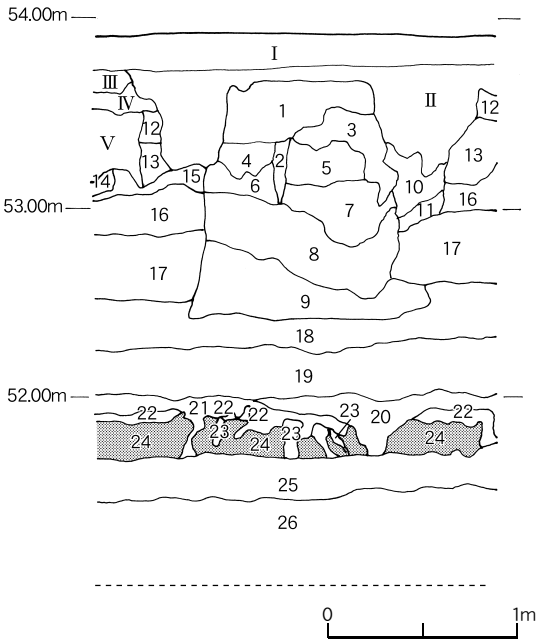
上ノ宿遺跡は，久慈川の右岸，標高約54mの台地上に位置している。当遺跡は旧石器時代，縄文時代，弥生時代，奈良・平安時代，中世の複合遺跡で，今回で第４次調査となり，前回まで実に27,657㎡を調査し，市内における古代の拠点的集落としては最大規模であることが実証されている。本調査区域は面積144㎡で，現況は畑地である。

今回の調査によって，遺構として弥生時代後期の竪穴遺構２基と古代の掘立柱建物跡１棟が検出された。また遺物は，弥生土器(壺)，土師器(甕)，須恵器(坏)，石器(凹石・磨石)が出土している。

第２節　基本層序（第４図）

第４次調査でも旧石器時代に係る文化層を確認するための深掘調査を実施した。調査地点は調査区南東隅Ｄ－４区で２×２ｍのテストピットを設定し，表土層上面から2.9mまでの基本土層の観察を行った。ここではⅠ～Ⅴ層が耕作土にあたる。また平面では確認できなかったが，１～11層は断面がフラスコ形を呈しており，風倒木痕と推測される。なお，14層は今市パミス層であり，24層は鹿沼軽石堆積層である。

Ⅰ層　黒色土(10YR1.7/1)　表土層・耕作土。締りが弱く，粘性にややとむ。
Ⅱ層　黒褐色土 (10YR3/1)　耕作土。締まりが弱く，粘性にややとむ。
Ⅲ層　黒色土(10YR2/1)　耕作土。締りが弱く，粘性にとむ。
Ⅳ層　灰黄褐色土(10YR4/2)　耕作土。締りが弱く，粘性に欠ける。
Ⅴ層　黒色土(10YR2/3)　耕作土。締りが弱く，粘性に欠ける。
１層　黒色土(10YR2/1)　白色粒子を僅かに含む。締りがやや弱い。
２層　暗褐色土(10YR3/3)　白色粒子を僅かに含む。締りが弱い。
３層　黒褐色土(10YR2/3)　白色粒子を多く含む。締りが強い。
４層　にぶい黄褐色土(10YR6/3)　白色粒子を僅かに含む。締りが弱い。
５層　黒褐色土(10YR3/2)　白色粒子を僅かに含む。締りが弱い。
６層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　赤色粒子・白色粒子を多量に含む。締りが強く，堅緻である。
７層　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　赤色粒子・白色粒子を多く含む。締りが強く，堅緻である。
８層　褐色ローム層(10YR4/6)　白色粒子を僅かに含む。締りが強く，粘性がある。
９層　明黄褐色土(10YR7/6)　白色粒子を僅かに含む。締りが強く，堅緻である。
10層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　赤色粒子・白色粒子を多量に含む。締りが強く，堅緻である。
11層　黄褐色土(10YR5/6)　赤色粒子・白色粒子を多く含む。締りが強く，堅緻である。
12層　黒色土(10YR2/1)　白色粒子を僅かに含む。締りがやや弱い。
13層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　赤色粒子・白色粒子を多量に含む。締りが強く，堅緻である。
14層　橙色パミス層(5YR7/8)　今市パミス(Nt－Ⅰ)に対比される。橙色粒子は比較的粗く，堅緻である。



第４図　基本層序

15層　明黄褐色ローム層(10YR6/8)　ソフトローム漸移層。白色粒子を僅かに含む。締りがやや弱く，粘性にとむ。

16層　黄褐色ローム層(10YR5/8)　ソフトロームである。締りがやや弱く，粘性にとむ。

17層　明黄褐色ローム層（10YR6/6）ハードロームである。白色粒子を含む。締りが強く，粘性にとむ。

18層　黄褐色ローム層(10YR5/6)　硬質のハードロームである。堅緻で締りがある。

19層　褐色ローム層(10YR4/4)　第２黒色帯に比定される。堅緻で締りがある。

20層　にぶい橙色ローム層(7.5YR6/4)　白色粒子を含み，締りが強く，堅緻である。

21層　にぶい黄褐色ローム層(10YR5/3)　硬質の堅緻で締りがある。上層よりも色調が明るい。

22層　灰黄褐色ローム層（10YR6/2）黄色パミスを多く含む。締りが強く，堅緻である。

23層　にぶい黄色ローム層(2.5YR6/3)　黄色パミスを多く含む。締りが強く，堅緻である。

24層　黄色パミス層(2.5YR8/8)　赤城－鹿沼(Ag－KP)の堆積層である。粒子が比較的粗く，締りは強いが，粘性に欠ける。

25層　にぶい黄褐色ローム層(10YR5/4)　黄色パミスを僅かに含む。締りが強く，堅緻である。

26層　灰褐色ローム層(10YR4/2)　白色粒子を含む。締りが強く，粘性にとむ。

（大渕由紀子）

第３節　遺構と遺物

１　弥生時代の遺構と遺物

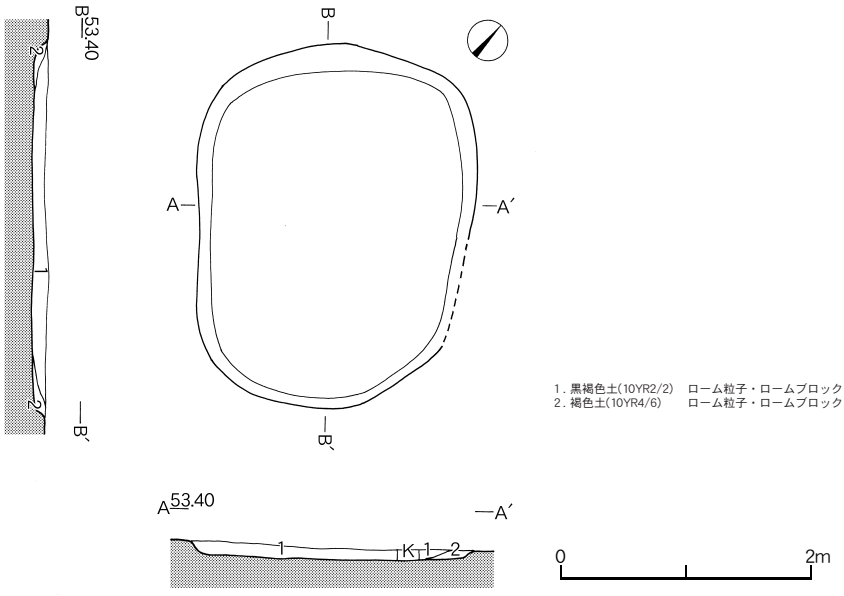
（１）竪穴遺構

今回の調査では，弥生時代後期の竪穴遺構２基を検出した。以下，検出した遺構と遺物について記載する。

１）SI130（第５・６図）

調査区南東部のＤ－３・４区に位置し，南東部の壁辺が後世の攪乱を受けている。平面形は南北に長い楕円形を呈し，規模は南北軸長2.87m，確認される東西軸長2.17mを測り，主軸方位はＮ－40°－Ｗを示す。床面は平坦で，明瞭な貼床構築がみられないが，部分的に硬化面が確認できた。壁面は外傾気味に立ち上がり，壁高は4.0～9.0cmを測る。壁溝および柱穴は検出できなかった。覆土は２層に分層でき，１層黒褐色土がほぼ全面を覆っている。明瞭ではないが，多量のロームブロックやローム粒子を含有していることから埋め戻し土層であろう。掘方は確認できなかった。

遺物は，弥生土器片２点が出土している。いずれも覆土中からの出土である。１は壺の胴部破片であ



第５図　SI130実測図

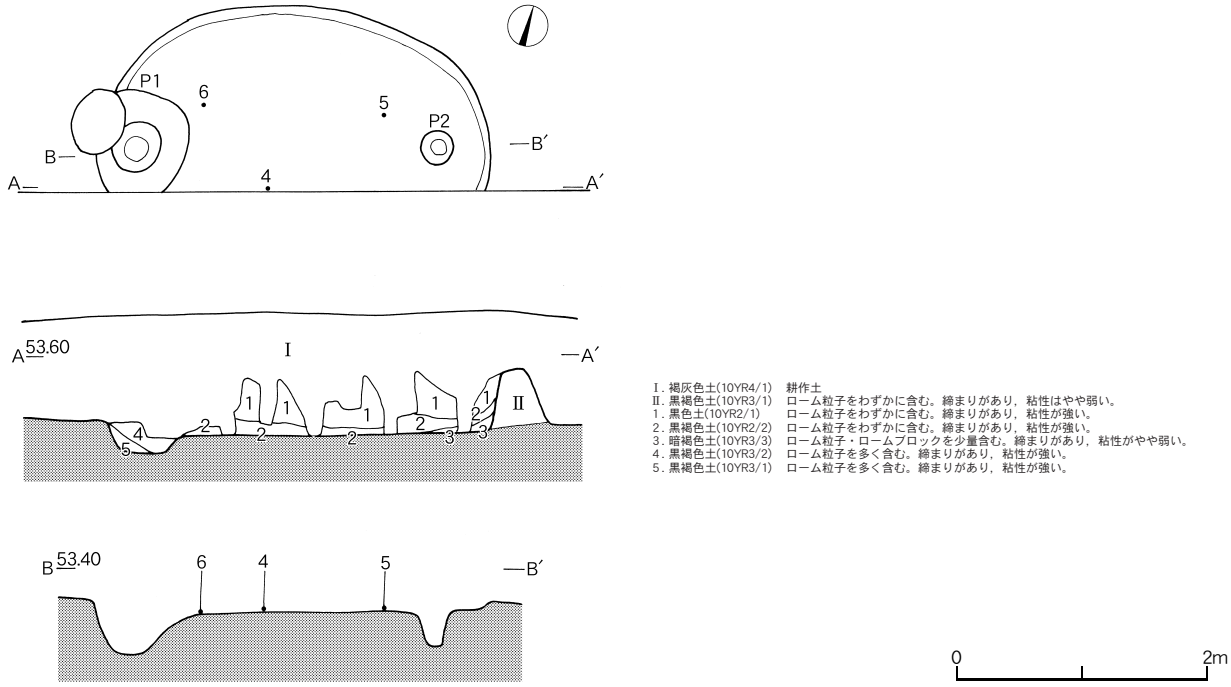
第６図　SI130出土遺物実測図

る。内灣気味に外傾しながら開く。外面は付加条縄文で，内面はナデ成形である。胎土に金雲母片，黒色粒子を含む。２も壺の胴部破片で，直線的に外傾しながら立ち上がる。外面は器面剥離している。文様は付加条縄文で，内面はナデ成形である。胎土に金雲母片，黒色粒子を含む。

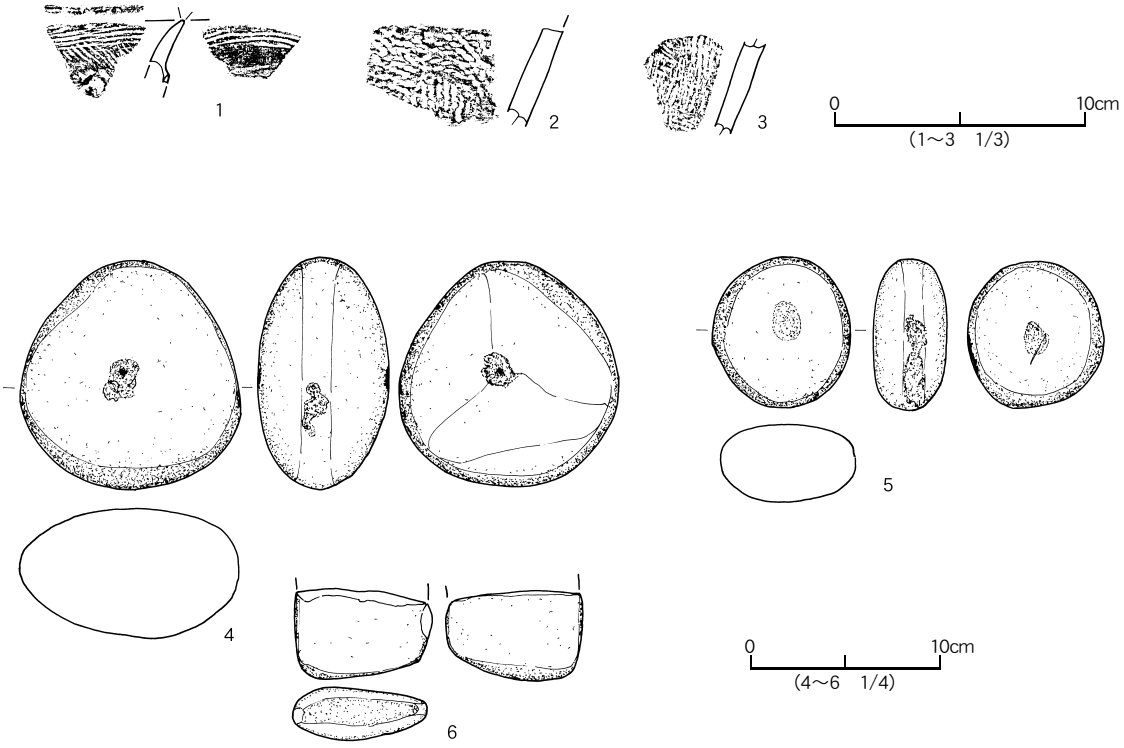
これら出土遺物は弥生時代後期前半に比定される。

２）SI131（第７・８図）

調査区の南端，Ｄ－３，Ｅ－３区に位置する。南約半分は未調査区域に延び，西端はSB23のＰ６に掘り込まれている。平面形は東西に長い楕円形を呈し，検出された規模は南北軸長1.47m，東西軸長3.12mを測り，主軸方位はＮ－72°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦で，明瞭な貼床構築はみられないが，部分的に硬化面が確認できた。壁面は外傾気味に立ち上がり，壁高は4.5～11.0cmを測る。壁溝は構築されていない。柱穴は2本検出できた。Ｐ１は西壁端部に位置し，西壁に掘り込まれたSB23のＰ６に切られ，さらに南の一部が未調査区域に延びている。検出した規模は，径70.0×83.0cm，深さ22.0cmの楕円形で擂鉢状の掘り込みの中央部に，径36.5×39.0cm，深さ12.0cmの円形の柱穴がある。東柱穴のＰ２は径24.0×25.0cm，深さ28.0cmの円形を呈する。覆土は３層に分層でき，１層が覆土の全面を覆い，２層が床面上に堆積し，全体的にレンズ状の自然堆積層である。掘方は確認できなかった。



第７図　SI131実測図



第８図　SI131出土遺物実測図

遺物は，弥生土器片３点と石器が３点出土している。弥生土器は覆土中から，石器は床面上に散在していた。１～３は弥生土器である。１は壺の口縁部破片で，くの字状に短く外反する。外面に付加条縄文を施文し，刻みを巡らし，口唇部に縄文原体，さらに内面上部に付加条縄文を施文する。黒色粒子を

含有する。２は直線的に外傾しながら開く壺の胴部破片である。外面は単節ＬＲ施文で，内面はナデ成形である。胎土に黒色粒子を含有する。３も壺の胴部破片である。直線的に外傾しながら開く。外面は付加条縄文で，内面はナデ成形である。胎土は黒色粒子を含む。４～６は石器である。４は砂岩製の凹石で，完形である。形状はオムスビ形を呈した自然礫を利用し，整形は全く行われず，凹部は表裏両面中央部にみられ，径1.5cm前後，深さ0.1～0.15cmの敲打痕である。さらに図右側面にも敲打痕を有する。大きさは長さ11.91cm，幅11.53cm，厚さ6.57cm，重さ1,252.0ｇを測る。５は砂岩製の磨石である。完形で楕円形を呈した自然礫を利用している。表裏両面中央に径２cm前後の微弱な敲打痕をもつ。また側縁部には磨り痕が帯状にほぼ全周し，部分的に敲打痕が認められる。大きさは長さ8.2cm，幅7.11cm，厚さ1.14cm，重さ339.0ｇを測る。６は軟質砂岩製の磨石で，欠損品である。下端面に平坦な磨面がみられ，表裏の自然礫面全体に磨滅が認めれれる。現存の大きさは長さ4.63cm，幅7.31cm，厚さ2.56cm，重さ129.0ｇを測る。

これら出土遺物は弥生時代後期前半に比定される。

２　古代の遺構と遺物

今回の調査で，奈良・平安時代の掘立柱建物跡１棟を確認した。以下検出した遺構と遺物について記述する。

（１）掘立柱建物跡

１）SB23（第９・10図）

調査区南西隅のＤ－２・３，Ｅ－２・３区に位置する。北東部のみの検出で大半は未調査区域に延び，東側ではSI131の西端を切っている。柱穴は６本検出され，少なくとも柱間は２間×２間以上の建物跡である。主軸方位は不明であるが，南北棟の建物跡とするならば，Ｎ－13°－Ｗを示す。確認できる規模は東西3.8m以上，南北2.85m以上で，柱間寸法は1.8mである。なお，検出された柱穴は，北柱列の西から東柱列へ番号を付け，柱掘方と柱抜取穴を含めたＰ１からＰ６の６本である。Ｐ１は西側の大半が未調査区域に延びており，検出は東端の一部のみである。隅丸方形を呈し，深さ24.0cmで明瞭な柱掘方として確認できないため柱抜取穴と推測される。Ｐ２とＰ３は重複しており，柱掘方と柱抜取穴であろう。西のＰ２が柱掘方で東西に長い隅丸長方形を呈し，深さ56.0cmを測り，ほぼ中央に23.0×27.0cm，深さ11.5cmの円形ピットが検出された。柱根痕と推測され底面がわずかに硬化していた。ここからまとまった遺物が出土している。東のＰ３は柱抜取穴で，東西に長い楕円形を呈し，深さは12.0cmである。Ｐ４とＰ５も重複しており柱掘方と柱抜取穴であろう。西のＰ４が柱掘方でやや東西に長い隅丸方形を呈し，深さ53.0cmを測る。底面には柱根痕等の柱当たり硬化面は確認できなかった。東のＰ５は柱抜取穴で，東西に長い楕円形を呈し，深さは49.0cmである。Ｐ６はSI131を切って構築された柱掘方であろう。南北に長い楕円形を呈し，深さ48.0cmを測る。底面には柱当たり硬化面は確認できなかった。ここで，検出された柱穴の計測値を一覧表に掲げた。

柱穴計測値（単位cm）

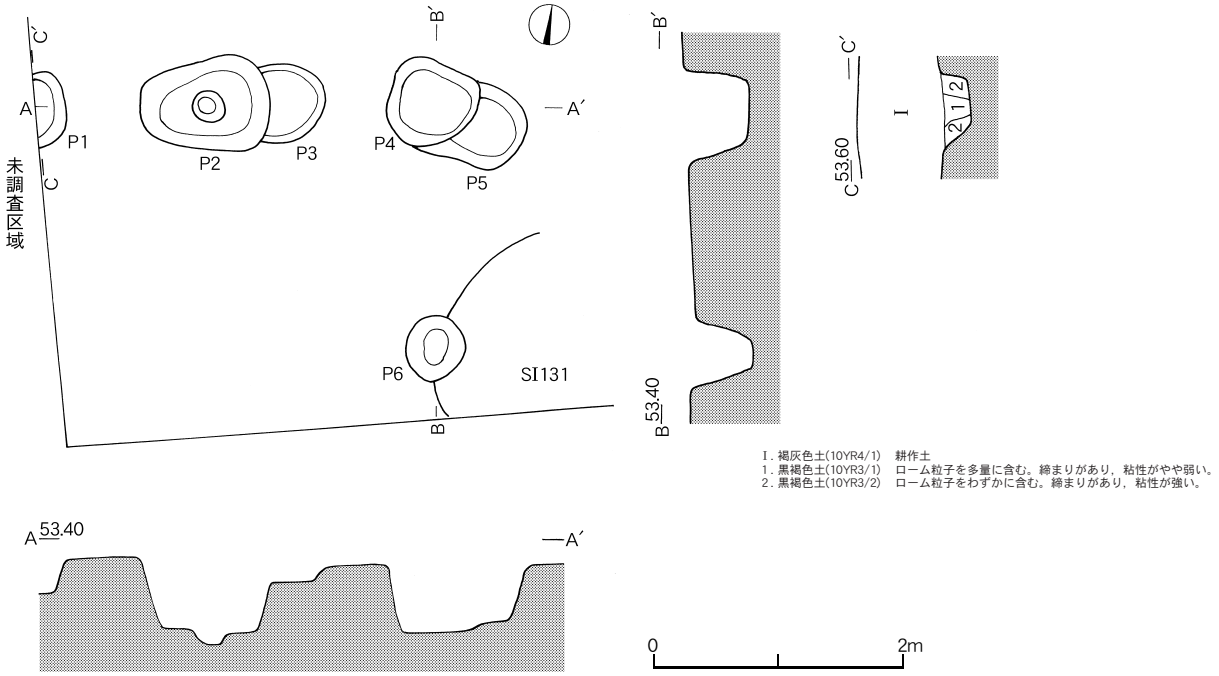
	南北軸 × 東西軸	深さ		南北軸 × 東西軸	深さ		南北軸× 東西軸	深さ
Ｐ１	58.0 × (21.0)	24.0	Ｐ２	70.0 × 103.0	56.0	Ｐ３	61.0 × (43.0)	12.0

Ｐ４　70.0 × 70.0　53.0　Ｐ５　60.0 × (44.0)　49.0　Ｐ６　53.0 × 42.0　48.0

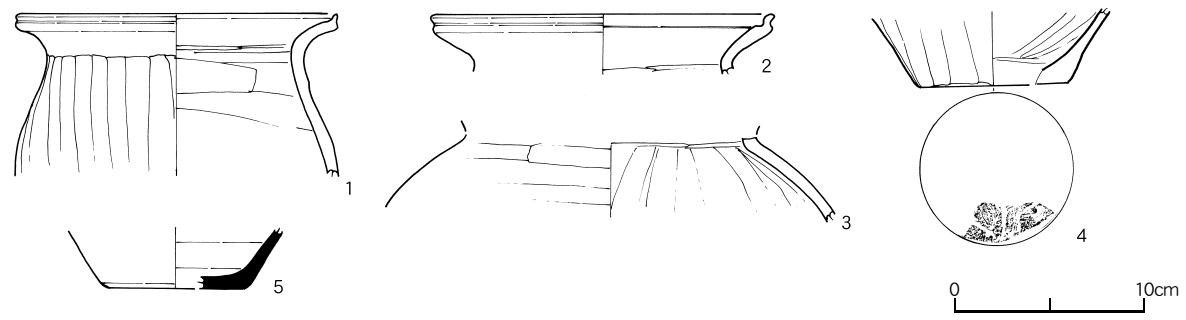
遺物として，Ｐ２の掘方埋土中から土師器と須恵器片が出土している。第10図１～４は土師器甕である。１・２は口縁部破片で，体部から口縁部が大きく外反し，口唇端部で短く摘み上げられる。口縁部はヨコナデ，体部はヘラケズリである。３は肩部の破片である。大きく内彎する。４は底部付近の破片である。外面は縦位のヘラケズリ，底部は木葉痕を残す。５は須恵器坏の底部破片である。ロクロ成形で底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリである。産地不明であるが，８世紀第４四半期から９世紀第１四半期に比定される。外面が摩耗しており使用頻度の高い土器と推測される。

遺構の年代は，出土遺物から８世紀第４四半期から９世紀第１四半期と考えられる。

（大渕淳志・大渕由紀子・小川和博）



第９図　SB23実測図



第10図　SB23出土遺物実測図

第４章　まとめ

１　はじめに

上ノ宿遺跡は，今回の発掘調査で第４次調査となる。調査対象地は，携帯電話基地局の建設ということで調査面積こそ144㎡と小規模であったが，遺跡中央の西端部にあたり，集落の広がりや縁辺部の様相を明らかにすることができた。ここで検出された遺構は，弥生時代の竪穴遺構２基と奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟である。また遺物としては，弥生時代の土器と石器，奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。

当遺跡は既に27,657.68㎡に及ぶ発掘調査が実施されており，古墳時代を除く旧石器時代，縄文時代，弥生時代，奈良・平安時代，中世の複合遺跡で，特に縄文時代中期末葉から後期初頭の集落内に形成された104基の土坑群は県内でも数少なく，市内では初見であった。また奈良・平安時代の集落跡は圧巻である。竪穴建物跡113軒，掘立柱建物跡22棟のほか，円形有段遺構，方形区画遺構などが検出され，周辺地域における一大拠点的集落を呈している。こうした中にあって弥生時代については，第３次調査において後期の土器片が出土したのみであった(小川他2013)。しかし，今回初めて居住施設ではないものの，明確な当該期の遺構を検出することができた。ここでは，弥生時代の遺構である竪穴遺構について県内の類例に触れてまとめとしたい。

２　検出された竪穴遺構について

調査区南で２基の楕円形を呈した遺構を検出した。確認当初長軸が３m前後を測ることから竪穴建物跡と推定し，遺構の分類記号である「SI」を付記し当遺跡における一連の遺構番号とした。床面の状況として貼床構築は見られないが，わずかに踏み固めた硬化面が確認できたためである。しかし炉址はなく，壁面は浅く明瞭ではないため日常的な居住施設としは使用していないものと判断した。その規模について概観すると下記のとおりである。

遺構番号	平面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	主軸方位	柱穴数
SI130	楕円形	2.87 ×2.17	4.0～9.0	N－40°－W	0
SI131	楕円形	3.12×(1.47)	4.5～11.0	N－72°－E	2

これら遺構から遺物として，弥生土器が出土し，さらにSI131からは土器のほか石器３点が検出されている。土器はいずれも壺の小破片で，明確な時期を判断できないが，後期前半と推定される。

さて，地面を掘り下げて床面をつくった建物が「竪穴住居」と呼ぶか，あるいは「竪穴建物」と呼ぶかについて問題提起されてから久しい(渡辺1992)が，本例のような遺構が「竪穴建物」や「竪穴住居」なのか，「竪穴遺構」なのか，あるいは「土坑」なのかという区分については，今なお明確な定義がなされているわけではない。

遺構の呼び名のうち，かつて普通に使用していた「竪穴住居」が，現在では「竪穴建物」とすべきとの意見が定着しつつある。つまり地面を掘削し床面を持つ遺構のすべてが，人が住み，基本的な生活行動(食事・就床・作業など)をする場である「住居」であったわけではなく，工房などの作業場や季節ごとの一時的な小屋など非日常生活的な施設のものも考えられることから「竪穴住居」ではなく「竪穴建

物」と呼ぶとされている(文化庁文化財部記念物課2010・桐生2015)。時期や地域により，その規模は一辺10mを超える大型建物から１～２m前後の小型建物があり，そして平面形は円形・楕円形・方形・長方形・五角形や六角形などの多角形などバラエティーにとむ。これに対し「竪穴遺構」と呼ぶ施設については，その定義が非常に曖昧である。竪穴建物は基本的に屋根などの上部構造をもち，それを支持する柱や壁があること。そして炉址やカマド，貯蔵穴などの付帯施設の存在によって，その規模に関わらず比較的容易に建物跡と判断することができる。しかし，本遺跡のSI131では長軸の両端に柱穴が検出され，上屋構造の存在が推定されるものの，炉址がなく，床面も部分的な硬化面のみで「竪穴建物」という呼び名の範疇から外れるものと推測できる。また同じくSI130は柱穴がなく，炉址などの付帯施設も具備されず，床面の軟弱さから同様の判断ができる。つまり頻繁に人の出入りの痕跡を確認できず，常住できる居住施設ではないと考えられるからである。とはいえ，土坑と区別するのも困難である。土坑とは「人為的に掘られた穴の総称(文化庁文化財部記念物課2010)。」であり，機能や用途は多種多様で，その種類は貯蔵穴，墓穴，落とし穴(陥穴)，ゴミ穴，粘土採掘坑，井戸，柱掘方などが考えられている。それらは総体的に規模が小型であるとすることができる。そこで「竪穴遺構」とは，地面を掘り下げた施設であるが，機能や用途がある程度判断できる竪穴建物あるいは土坑とは区別し，規模についても同じように竪穴建物でもなく，土坑でもない，その他の遺構となろう。そのため各報告書をみると，竪穴遺構の分類記号が「SI(竪穴建物跡)」，「SK(土坑)」あるいは「SX(その他の遺構)」といった具合で一律ではない。そこでこの遺構の性格を知るため，本遺跡で検出した竪穴遺構の属性を整理してみたい。

① 平面形は楕円形を呈する。

② 規模は長軸が５m以内で，短軸が３m以内である。

③ 底面は貼床構築ではなく，わずかに踏み固めた硬化面が確認できるものの，軟弱である。

④ 壁面は緩く外傾(もしくは内灣気味)して立ち上がる。掘削深度の比較的深いものもある。

⑤ 柱穴や貯蔵穴以外で，居住施設に伴う炉址やカマドなどの付帯施設を具有しない。

⑥ 出土遺物のうち，壺や甕などの完形もしくは完形に近い土器は皆無で，破片のみである。

これら属性のうち①と②の楕円形の掘り込みが特徴といえる。これを「楕円形竪穴遺構」と呼び，中・近世において多くみられる「方形竪穴遺構」と対置することができよう。

３　茨城県内における楕円形竪穴遺構

こうした楕円形竪穴遺構の類例を県内の主な遺跡から見てみたい。

ひたちなか市高野寺畑遺跡　２基検出され，後期前半に比定される。Ⅰ－８号遺構は，規模が4.40×4.20mの円形(隅丸方形もしくは楕円形に近い)で，土器片と石器(凹石・敲石)が出土している。またⅠ－25号遺構は,，規模が4.03×2.82mの楕円形で，土器片が出土している。いずれも底面は軟弱で，付帯施設がない。これら竪穴遺構群の周辺には竪穴建物跡１軒が検出されており，集落内構成を示している(川崎他1979)。

つくば市明石遺跡　１基検出され，後期中葉に比定される。第71号住居跡で，規模は3.53×2.29mの楕円形である。覆土中から土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡12軒が検出されており，集落

内構成を示している(寺門他2000)。

水戸市二の沢Ａ遺跡　１基検出され，後期後半に比定される。第93号土坑で，規模は3.18×2.48mの楕円形である。土器片と紡錘車が出土している。周辺には竪穴建物跡２軒が検出されており，集落内構成を示している(江幡2003)。

水戸市二の沢Ｂ遺跡　埋葬土坑２基を含む土坑５基が検出され，うち３基が竪穴遺構とすることができる。いずれも後期後半に比定される。第50号土坑は，規模が4.52×2.4mの楕円形で，覆土中から土器片が出土している。第115号土坑は，規模が2.75×2.4mの不整楕円形で，やはり土器片が出土している。第124号土坑は，規模が2.36×2.27mの不整円形で，柱穴を伴う。覆土中から土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡13軒が検出されており，集落内構成を示している(江幡2003)。

茨城町大戸下郷遺跡　１基検出され，後期後半に比定される。第174号土坑は，規模が3.36×3.0mの楕円形である。北西部に副施設である浅い掘り込みがあり，土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡29軒が検出されており，集落内構成を示している(綿引2006)。

常陸大宮市上岩瀬富士山遺跡　２基検出され，後期後半に比定される。うち第１号土坑は，規模が2.58×1.9mの楕円形である。底面に硬化面が確認できるものの，炉址はない。覆土中から土器片が出土しており，階段状の施設があり，「貯蔵穴の性格」を持つものと推定されている。また第２号土坑は，規模が2.44×1.46mを測る円形もしくは楕円形遺構で，土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡７軒が検出されており，集落内構成を示している(渡邉2006)。

筑西市栗島遺跡　１基検出され，中期後半に比定される。第50号土坑で，規模は2.0×1.36mの小型の楕円形を呈した遺構である。底面から土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡はない(奥沢2007)。

東海村馬場崎遺跡　SI02・13・14・18～22・24の９基が相当し，後期前半に比定される。各遺構は上記属性がすべて整い，しかも柱穴あるいは副施設である貯蔵穴状の浅い掘り込みを伴う。なお，これら竪穴遺構群の周辺には竪穴建物跡はなく，明瞭な集落内構成を示していない(小川2009)。

東海村豊岡宮前遺跡　SI24～26・29・45・53・54・SK68・422の９基が相当し，後期前半に比定される。柱穴や副施設である貯蔵穴状の掘り込みを伴うものもある。なおSI54は長軸と短軸に差がみられない一辺３mの隅丸方形状を呈するが，そこから土器とともに磨石類が３点出土している。これら竪穴遺構群の周辺には竪穴建物跡１軒が検出されており，集落内構成を示している(小川2009)。

石岡市中津川遺跡　２基検出され，後期前半に比定される。うち第22号住居跡とされる遺構は，規模が3.80×3.22mの楕円形を呈し，炉址はなく，底面の硬化面は確認できないことから楕円形竪穴遺構とすることができる。覆土中から土器片が出土している。また第421号土坑は，規模がやや小型で2.13×1.22mを測る。覆土中から土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡７軒が検出されており，集落内構成を示している(櫻井2011)。

石岡市槙堀遺跡　１基検出され，後期前半に比定される。第108号土坑は，規模が2.28×1.86mと小型である。覆土中から土器片が出土している。周辺には竪穴建物跡8軒が検出されており，集落内構成を示している(櫻井2013)。

境町山崎遺跡群　１基検出され，後期前半に比定される。第151号土坑は，規模が3.06×2.96mの円形(楕円形に近い)の遺構である。底面から土器(壺1個体)と磨製石斧が出土している。周辺には竪穴建物

跡はない(大島2015)。

４　楕円形竪穴遺構の性格について

これら検出された楕円形竪穴遺構についてまとめると，構築時期については中期後半から後期末葉まで確認されている。しかし，中期後半に比定されているのは１例のみで栗島遺跡の第50号土坑である。規模が小さく，明確な形態を示していない。これは竪穴遺構とすべきではないのかも知れない。主体となるのは後期前半からである。また集落内における検出数をみると，東海村馬場崎遺跡および同村豊岡宮前遺跡の２遺跡を除き，各遺跡において１～２基程度である。例えば後期後半に比定され，21軒の竪穴建物跡が確認された拠点的集落跡の茨城町大戸下郷遺跡でも１基のみである(綿引2006)。この遺構は，県内の弥生集落跡を見る限り必ず検出されるものではなく稀な遺構のひとつといえる。言い換えれば各集落においては，必要不可欠な施設ではないことを意味している。

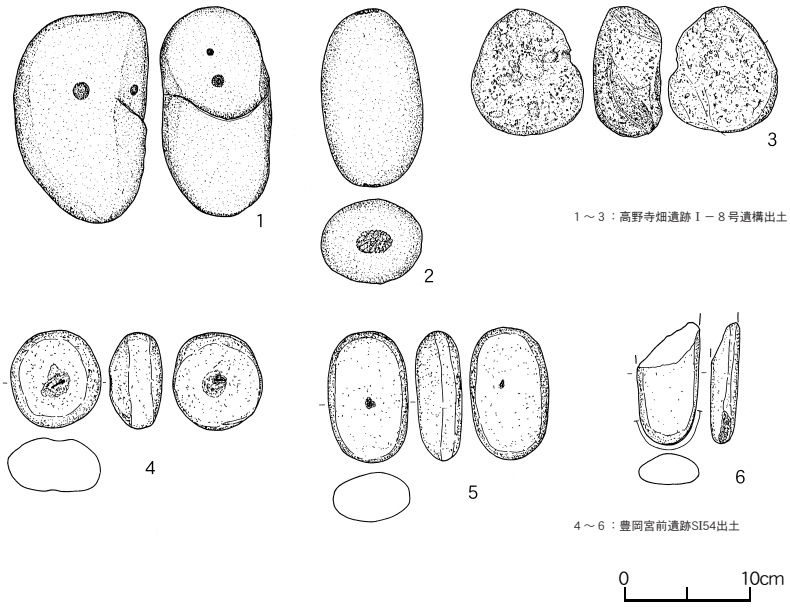
問題はこの遺構のもつ機能であり，用途である。わずかに常陸大宮市上岩瀬富士山遺跡において「貯蔵穴の性格を持っていたと推測される(渡邉2006)」との見解を示している以外，大半の遺跡は性格不明としている。一方平面形が楕円形という形状から埋葬施設とする意見があるが，後期後半に比定される水戸市二の沢Ｂ遺跡において３基の楕円形竪穴遺構と伴に，２基の埋葬施設が検出されている。第10号土坑は径１m程の円形土坑に大型壺形土器が斜位に埋設されていた土器埋設土壙墓であり，小児のための埋葬施設と推測される。また第139号土坑は，竪穴建物跡第31号住居跡内の中央西寄りに掘り込まれた屋内土壙墓(鈴木2008・2010)で，成人の埋葬施設とされており，この２基は他の遺構と確実に区別されていたものと判断できる。したがって，３基の竪穴遺構は埋葬施設以外の用途とすべきであろう。

そこで，SI131の底面で出土した石器が遺構の機能・用途について推測できる。とくに石器のうち，磨石類と呼ばれ自然礫をほとんど加工せず，使用痕のみが明瞭に残されているもので，種々の変化が認められる。SI131出土例３個のうち，第８図４は表裏面に敲打による凹部をもち，側面にも敲打痕がある。同図５は表裏面の敲打痕に加え，側縁部に帯状磨り痕と敲打痕を併せもつ。同図６は一面に磨面のあるものである。同様にひたちなか市高野寺畑遺跡のⅠ－８号遺構でも３個の磨石類が出土している(第11図１～３)。いずれも加工が施されていない自然礫で，凹石・敲石・磨石である。同図２の敲石は全面に磨面が認められる(川崎他1979)。次に東海村豊岡宮前遺跡のSI54においては磨石類が３点出土している(第11図４～６)。同図４は表裏面に敲打による凹部をもち，側面にも磨痕がある。同図５も表裏面に敲打痕をもち，側縁部に帯状磨痕をもつ。同図６は端部に敲打痕がある。なお，ＳＫ68では粘板岩製の石鍬が出土している(小川2009)。

こうした磨石類の用途については，植物質食料の粉砕・製粉化作業を行う道具のひとつとして考えられている。これら道具は持ち運びが容易な可動具であり，まだ使用可能な道具にも関わらず遺構内に遺棄されること自体むしろ不自然と考える。しかし，現実検出されることから，不必要になったものを廃棄するというより，置き忘れたものとするならば，明らかにその遺構に伴うものと理解することができる。そこでこれら遺構の規模から判断して，一人もしくは二人程度の少人数で行う作業場と考え，併せて貯蔵用途をも兼ね，常住としない簡易小屋と理解したい。

5　おわりに

当遺跡は，今まで膨大な面積を調査したにも関わらず，弥生時代の遺構・遺物が極端に限定されていた。遺跡そのものはさらに広がることは予想されるものの，弥生集落本体の存在を含め，いまだ未知数のままである。ここでは，今回の調査で検出された２基の楕円形竪穴遺構についてまとめ，さらにそれらの類例を茨城県内に求め集成した。構築時期はほぼ後期に比定でき，その性格については，貯蔵穴を併せ持つ簡易的な作業場と推測し，埋葬施設としての機能を除外した。しかし，集落内の位置付けについては，十分に検討することができなかった。それは１集落内において，決して必要不可欠な施設ではなかったと判断できるからである。これらは決して目立つ遺構ではないが，今後県内における弥生時代後期の動態を検討する上で十分に注意されることを期待したい。



第11図　高野寺畑遺跡・豊岡宮前遺跡出土の磨石類

（小川和博・遠藤啓子）

参考文献

江幡良夫・黒澤秀雄　2003『十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　二の沢Ａ遺跡　二の沢Ｂ遺跡(古墳群)　ニガサワ古墳群』(茨城県教育財団文化財調査報告第208集)

大島孝博・齋藤和浩　2015『一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書　西泉田伏木遺跡　山崎遺跡群』(茨城県教育財団文化財調査報告第392集)

小川和博他　2008『上ノ宿遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2009『茨城県那珂郡東海村白方遺跡群』東海村教育委員会

小川和博他　2009『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第2次調査Ⅰ』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2009『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第2次調査Ⅱ』常陸大宮市教育委員会

小川和博他　2013『上ノ宿遺跡Ⅲ』常陸大宮市教育委員会

奥沢哲也　2007『一般国道50号下館バイパス改築事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　栗島遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第268集)

川崎純徳他　1979『高野寺畑遺跡』高野寺畑遺跡調査団

桐生直彦　2015「「竪穴住居」から「竪穴建物」へ」『季刊考古学』第131号　雄山閣

櫻井完介・近江屋成陽・大久保隆史　2011『一般国道６号千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川～石岡市東大橋)事業地内埋蔵文化財調査報告書５　中津川遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第338集)

櫻井完介　2013『一般国道６号千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川～石岡市東大橋)事業地内埋蔵文化財調査報告書７　槙堀遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第370集)

鈴木素行　2008「「屋内土壙墓」からの展望　－弥生時代後期「十王台式」の埋葬を考えながら－」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室編

鈴木素行　2010「続・部田野のオオツタノハ　－茨城県域における弥生時代「再葬墓後」の墓制について」『古代』第123号　早稲田大学考古学会

寺門千勝・大関武　2000『主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　明石遺跡，明石北遺跡，上白畑遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第164集)

早川麗司　2004「茨城県内の弥生時代土器棺墓・土坑墓集成」『年報』23　財団法人茨城県教育財団

早川麗司　2005「茨城県内の弥生時代土器棺墓・土坑墓集成(２)」『年報』24　財団法人茨城県教育財団

文化庁文化財部記念物課監修　2010『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』同成社

綿引英樹・松本直人　2006『主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　大戸下郷遺跡２』(茨城県教育財団文化財調査報告第257集)

渡辺修一　1992「「竪穴住居」か「竪穴建物」か」『研究連絡誌』第34号　(財)千葉県文化財センター

渡邉浩実　2006『17国補導改第17‐03‐068‐0‐053号埋蔵文化財調査報告書　上岩瀬富士山遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第260集)

付表　出土土器観察表

遺構番号	挿図番号 第　図	器　種	法量(cm) 口径	器高	底径	整形・調整	胎土	焼成	色調	遺存度	備考
SI130	6 - 1	弥生土器　壷	-	-	-	付加条縄文。	金雲母・黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	胴部破片	
	6 - 2	弥生土器　壷	-	-	-	付加条縄文。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄橙色	胴部破片	
SI131	8 - 1	弥生土器　壷	-	-	-	外面付加条縄文。刻み。口唇部縄文原体。内面付加条縄文	黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	口縁部破片	
	8 - 2	弥生土器　壷	-	-	-	単節ＬＲ	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄褐色	胴部破片	赤彩
	8 - 3	弥生土器　壷	-	-	-	付加条縄文。	黒色粒子・石英・長石	良好	黒褐色	胴部破片	
SB23P-2	10 - 1	土師器　甕	[17.0]	(8.5)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。 内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	暗赤褐色	口縁部1/4残存	
	10 - 2	土師器　甕	[18.0]	(3.3)	-	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	暗赤褐色	口縁部1/8残存	
	10 - 3	土師器　甕	-	(4.4)	-	外面ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	黒褐色	体部破片1/5残存	
	10 - 4	土師器　甕	-	(3.8)	[8.0]	外面ヘラケズリ。 内面ヘラナデ。 底部木葉痕。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	底部1/5残存	
	10 - 5	須恵器　坏	-	(3.1)	[7.0]	ロクロ成形。 底部回転ヘラ切り。	黒色粒子・石英・長石	良好	灰色	下半部1/4残存	

写 真 図 版

1．遺跡遠景（東から）

2．調査前近景（西から）

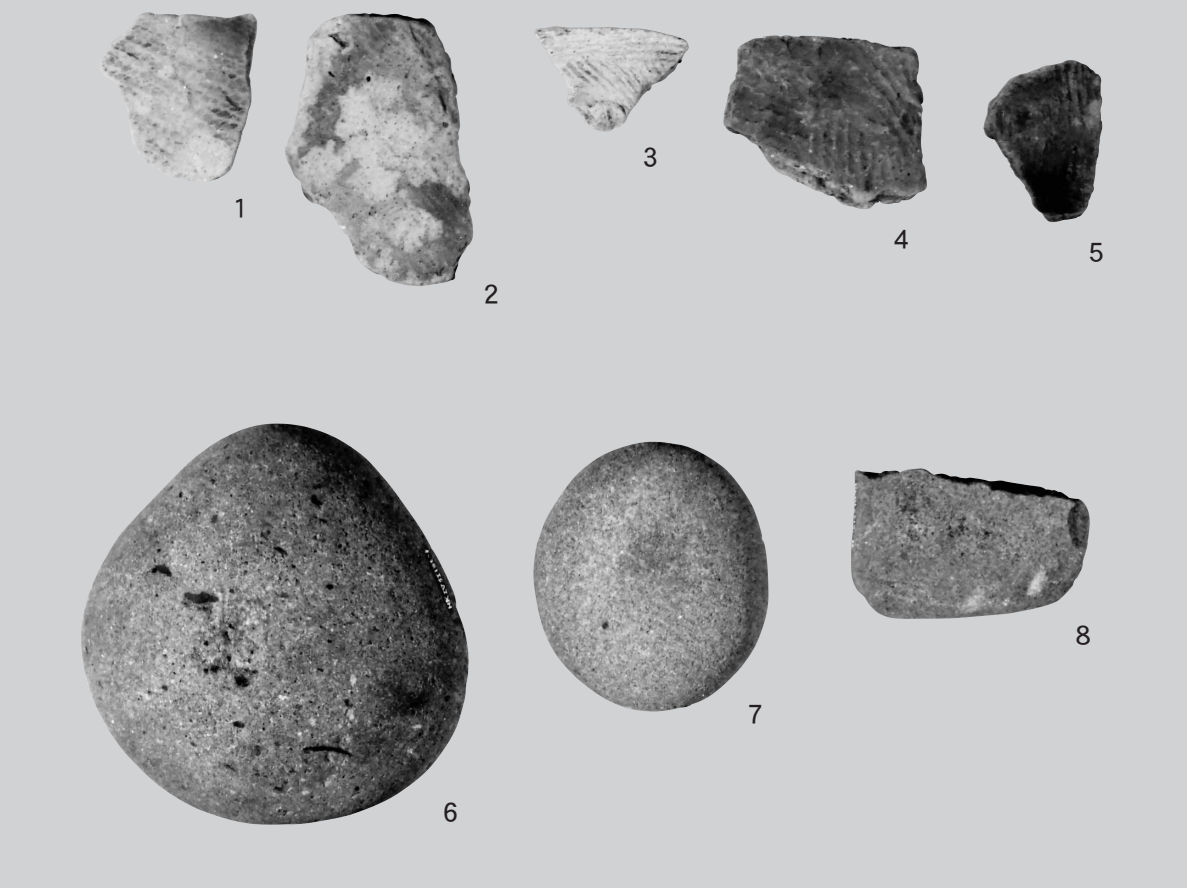
1．調査区全景（南から）

2．基本層序（PG）（西から）

1．SI130全景（南西から）

2．SI131全景（北から）

PL.4



1．SI130・131出土遺物（1・2：SI130、3～8：SI131）

1．SB23全景（北から）

2．SB23出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみのしゅくいせき
書名	上ノ宿遺跡Ⅳ
副書名	携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	後藤俊一（常陸大宮市教育委員会） 小川和博　大渕淳志　遠藤啓子　大渕由紀子（有限会社 日考研茨城）
編集機関	常陸大宮市教育委員会，有限会社 日考研茨城
所在地	〒319－2292 茨城県常陸大宮市中富町3135－6 TEL.0295－52－1111（常陸大宮市教育委員会） 〒300－0508 茨城県稲敷市佐倉3321－1 TEL.029－892－1112（有限会社　日考研茨城）
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319－2292　茨城県常陸大宮市中富町3135－6
発行年月日	西暦2014(平成26年)年３月31日

ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみのしゅくいせき 上ノ宿遺跡	いばらきけんひたちおおみやし 茨城県常陸大宮市 うるの 宇留野3065－1番地	421	117	36度 32分 42秒 08	140度 25分 09秒	20130408 ～ 20130430	144㎡	携帯電話基地局建設に伴う記録保存の為の調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ宿遺跡	集落跡	弥生時代 奈良・平安時代	竪穴遺構　２基 掘立柱建物跡　１棟	弥生土器 須恵器 土師器 石器	

要約

今回の調査は第4次調査で、遺跡の中央西端にあたる。縄文時代および奈良・平安時代の拠点的集落として周知されている本遺跡で、はじめて弥生時代の遺構が２基検出された。平面は楕円形を呈し、炉址等が明瞭ではない竪穴遺構である。覆土中より弥生時代後期の土器片及び石器が出土した。また調査区南西隅に掘立柱建物跡と推測される柱穴６本が確認できた。柱穴内から須恵器および土師器が出土しており、８世紀末から９世紀初頭に比定される。

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

【紙　質】

表紙	レザック66	215.0 kg
見返し	上質紙	70.5 kg
扉・序・例言・目次・本文	クリーム書籍用紙	57.5 kg
図版・抄録・奥付け	マットコート	70.5 kg

【印　刷】

オフセット印刷

印刷は黒

写真図版はダブルトーン印刷

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第17集

上ノ宿遺跡Ⅳ

携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

発　行　平成26年(2014)３月31日

著　者　後藤俊一　大渕淳志　遠藤啓子
　　大渕由紀子　小川和博

編　集　常陸大宮市教育委員会
　　茨城県常陸大宮市中富町3135－6
　　Tel 0295-52-1111
　　有限会社　日考研茨城
　　茨城県稲敷市佐倉3321-1
　　Tel 029-892-1112

発　行　常陸大宮市教育委員会
　　茨城県常陸大宮市中富町3135－6
　　Tel 0295-52-1111

印　刷　有限会社　田辺印刷